スーパーグローバル大学創成支援事業　令和６年度事後評価結果表

大 学 名	京都大学
整理番号	A08
構 想 名	京都大学ジャパンゲートウェイ構想

◇スーパーグローバル大学創成支援プログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価） A	十分な取組状況で事業目的が達成され、今後も持続的な発展が期待できる。

（コメント）

事業期間全体において、世界トップレベル大学との共同教育や学位プログラムの開発・実施を強化することによりネットワークを構築し、教育の国際化と研究力の強化を図り、情報と人材が日常的に行き交うワールドプレミアム高等教育ネットワークのジャパンゲートウェイ機能を担うべく、各種取組が推進されたものとなっている。これらの中で特に、特定分野で日本初のジョイントディグリープログラムを展開したことや、アジアのみならず欧米等との連携を通してバランスの良いものとなっている点が優れている。

具体的な事業展開にあたっても、新機構設置によるプログラム実施によりこれまで重点を置いていた大学院教育の更なる国際化を進めただけでなく、学部教育においてもボトムアップ型の国際化を同時に推進することにより、全体を体系的に取組んでいることは評価できる。その学部教育については、「Kyoto University International Undergraduate Program (Kyoto iUP)」や「国際高等教育院国際教育プログラム」の設置等による、外国人・日本人双方の学生に向けた取組みにより、国際性豊かなキャンパス環境が創造されたことはその証である。さらに、日本人学生については、E2 科目（英語による全学共通科目）の単位修得は全ての学部において卒業に必須としたことで大きな成果を上げており、他大学の模範となる取組みであるだろう。学生に向けての取組みだけでなく、「招へい外国人教員」の積極的な採用・活用により、大学のグローバル化及び研究・教育水準の向上に重要な役割を果たしており、これにより学生は、専門性の高い講義や共同学位指導が受けられ、最先端の知識を習得することができたのだろう。

一方で、日本人学生の送り出しや外国人学生の受入れについては、外的要因の影響があったとはいえ、相対的に低い目標だったにも関わらずその数値には届いていない。これらが要因として外国語力基準を満たす学生数も未達の一因となったことが考えられる。その他、転学科・転学部は制度として存在するものの実績はごくわずかであり、さらには副専攻制度が検討されているだけで、実施に及んでいない点などアカデミック・パスについての多様性・柔軟性には未だ課題が残る。

最後に、スーパーグローバル大学創成支援事業による補助期間は終了したが、引き続き徹底した「大学改革」と「国際化」を断行し世界的に魅力的なトップレベルの教育研究を行い、我が国社会の国際化の牽引に寄与されることに期待する。